

石井正己著

『遠野の民話と語り部』から

野 村 純 一

四六判、二百六十六ページ。どちらかといえは小振りな一冊である。講演録に手を加えて刊行された。そのために全体的な印象としては頃合の入門書、もしくは論説書としての趣きが強い。事実、著者もその点を勘案して『デス・マス体』で記述したという。叙述は丁寧で親しみのもてる仕上がりになつてゐる。ただし、そこでの内容は標題の設定から見て取れるように、そう簡単なものではない。

殊に「語り部」を扱つた後半部は、後に論議を呼ぶのは必至かと察せられる。おそらく著者自身もそれを望み、期待した上でこの言葉を据えたものと思われる。ここで書評は、当然それを回避し得ない。与えられた紙幅の中で、後程私見を述べる。順序としてその前に一冊の構成を紹介する。次のようになつている。

I 遠野へ——研究と觀光の町／II 御伽話のことと昔々と云ふ——『遠野物語』のことを昔々と云ふ——『遠野物語』の発見／III 語り部と語りの場への着目——『老嫗夜譚』の実験／IV 本邦最大の昔話集出づ——『聰耳草紙』の挑戦／V 卒業作文としての昔話集——『遠野郷昔嘶集』の足跡／VI 福田八郎さんと民話——『遠野の民話』『昭和48年1月冬休み民話集』の発刊／VII 遠野民話同好会と語り部——『遠野の昔話』の意義／VIII 昔話採集者のまなざし——『遠野に生きつづけた昔』の立場／IX 鈴木サツさんと昔話——語り部の誕生／X 遠野の語り部たち——一人のプロフィール。

この構成と共に伴うサヴ・タイトルの設定は要領よく、しかもこなれていて面白い。著者の狙いを巧みに演出しているといえよう。今日的な「研究と觀光」といった命題に到達するまでの流れを、時代を追つて「発見・実験・挑戦・足跡・発刊・意義・立場」、そして新たなる「語り部の誕生」という具合に

に抑えた。一方、それに対応して個々に「御伽話・語り手・昔話集」、ついで「民話・語り部・昔話採集者」、最後に「語り部たち」というように、これまた遠野における歴史的伸展にもとづいてならべている。キー・ワードによるこうした明示の仕方は、斬新な試みである。それと同時に本書の展開を鳥瞰する上でも成功していると読み取つた。読書案内としても手際よい。

以上で一冊の仕立て具合というか、そこでどの仕様を紹介した。続いて本来の「書評」に入る。石井正己氏は「あとがきにかえて」に次のように記している。

この一〇年にわたる遠野通いは、図書館・博物館の所蔵資料を分析することが中心でした。まず研究対象にしたのは、『遠野物語』でした。それまでのような共同体論や記号論ではなく、新たな視点からの研究を始めたいと思い『遠野物語』資料を中心とした文献学的研究にのめり込んでゆきました。その結果、安易なファイアードワークを意識的に避け、頑ななまでのデスクワークに徹することにしました。

しかし、今回、この本を上梓する見通しが立つたことは、遠野からの研究を発信す

る上で、ほかならぬ私自身にとつて大きな意味を持ちました。『遠野物語』以来の遠野の状況を把握したことによつて、それまで遠ざけてきた書き書きの場に臨むことができるようになつたからです。それは、研究者個人の関心を越えて、大きな歴史の流れを認識しながら、遠野の現在を考えることに拠ると思います。

一瞥“遠野学”とも称せるような、いわば、遠野の地を舞台にした、石井個人の新たな研究態勢の独立宣言ともいえる一節かと受け取つた。その際注意すべきは、この叙述にいうように、これまでの著者の方法は主として「図書館・博物館の所蔵資料を分析する」とが中心」の、しかも「『遠野物語』資料を中心とした文献学的研究」にあつたとする経過である。これがため「安易なフィールドワークを意識的に避け、頑ななまでのデスクワークに徹」して来たとする。ひとつ認められ、姿勢である。ただ、私などは「図書館・博物館」はいうまでもなく、美術館や民俗資料館、さらには行くさきざきに在る古書店、あるいは古美術店を歩くのも欠かせないフィールドワークの一環だと心得ている。一般に「佐渡物」は新潟市中に、そして「遠

野物」は仙台に出回るとされる。そういうれば以前に、遠野に在るとばかり思っていた伊能関係の文書類が一括して仙台にあつたことは、まだ記憶に新しいところである。遠野はいつも遠野の外に在ると承知していた方が、生産的かも知れない。

それからしても『遠野物語』のような在地の伝承にもとづく「文献」を扱う場合、周辺の「フィールドワークを意識的に避け」たまま「図書館・博物館の所蔵資料を分析する」「デスクワークに徹」したのでは、自家中毒に陥りかねない。そこで限界を自覚せざるを得ないのではないかと肘度する。その間、

生きた民俗語彙に對面しないまま、はたして民俗資料の分析が充分可能か、どうか、少々心許ない気がする。それでなくとも現地の絶対資料にはもともと限りがある。その一方、従前から著者が「意識的に避け」てきた「フィールド」にはそれらを遙かに凌駕する材料が残っている、というよりは依然として息づいており、しかもそこでは日を次いでそれが再生産されている。『遠野物語』の「文献学的研究」を差し置いて、もしくは余所目になつて迎えられてきた。新しい領域の開拓とも見做されるものであった。具体的には『遠野物語の誕生』『図説・遠野物語の世界』（二〇〇〇年）、ならびにこの二冊をめぐる一連の論文がそうである。ただし、それについては雑誌「口承文藝研究」第二十五号に藤井貞和氏による懇切な「書評」がある。重複は避けたい。それでも、本書Ⅲ「老嫗夜譚」の実験」の章で同書に向かって、

その結果見えてきたことは、「昔話集」ある。構成上、私はそれを一冊の後半部と見は、「作られている」ということでした。では、「作られている」ということはどういうことなのか、それが大きな課題となります。

従来、こうした現象を「創作」とか「文学」

という言葉で呼んできたところがありますが、いかにも安易でしょう。日本の「昔話」というものが、実はこうしたところから立ち上がりってきたことに対する、もう少し自覚的でありたいと思うのです（p.56）。

57。
といった論説に出会ふと、この部分だけで
もこの場を借りて、改めて紹介しておきたい
気持ちに駆られる。ここにはテキストを細かに
読み込んできた著者の、そのよい面がまことに
よく出ている。的確な指摘であり鋭い問題
提起がなされている。「文献」操作の結果、
従来はほとんど気付かれなかつた話題がごく
自然に引き出されると認められるからである。
前出、藤井氏の「書評」以後、著者には実際こうした文章のあつた事実を付け加え
ておきたい。

次にさき程記した「核心」の場面に移る。
主として本書の「VI」から「X」への展開で

ある。構成上、私はそれを一冊の後半部と見なした。実質的には石井氏が「頑ななまでのデスクワーク」、つまりは「文献学的研究」

から漸次「それまで遠ざけてきた聞き書きの場に臨むことができるようになった」。その上で「遠野の現状を考えることができる」という自信が持てた」と記すに至つた処である。

まず一冊の標題に登場させたこともあって著者は次のように述べている。

同じようにして、すこし遅れて福田（八郎）さんが導入したと思われる言葉にて著者は次のように述べている。

「語り部」を組上にのぼせたい。これについて著者は次のように述べている。

「語り手」と呼ばずに「語り部」と呼びます。なぜなら、遠野では「語り手」と呼ばずに「語り部」と呼びますが、

日本では一般に「語り手」と言って「語り部」とは呼びません。昔話研究の中

で使われる用語としては「語り手」が普通ですが、日本では一般に「語り手」と言つて

「語り部」とは呼びません。昔話研究の中

で使われる用語としては「語り手」が普通ですが、日本では一般に「語り手」と言つて

「語り部」とは呼びません。昔話研究の中

で使われる用語としては「語り手」が普通ですが、日本では一般に「語り手」と言つて

「語り部」とは呼びません。昔話研究の中

で使われる用語としては「語り手」が普通ですが、日本では一般に「語り手」と言つて「語り部」とは呼びません（p.111-p.118）。

この解説と整理の仕方は正鶴を射ている。間違いないと思う。したがつて、現にいま遠野で用いられる「語り部」は、従来の「昔話研究の中で使われる用語と」は、まったく違つております。受け継ぐ人はあの方とこの方と決めて、あの話は面白そつとか、本から採つたり、あの人から話を集めて喋らなりで、聴いたら遠野の人の心がわかるようござんすか。ただ、あの人は話は上手いな

つていう人は、聞いてもつまらないらしい

なす。ホントに語り継ぎたいという気持ちがあつたら、遠野の人たちの心を語り継ぐまでに、昔のそういうものを持って語り継いで欲しいなって思います。

右、発言内容は明快で、截然としている。ヤエ女が訴えるのは、私たちは遠野の「伝承者」、つまりは本来的な「語り手」であつて「語り部さん」とは違う。「あの話は面白そとか、本から採つたり、あの人から話を集めよる」ようなことは、一切しない。といった姿勢で昂然と相手方を批判している。同列に置いて貰つては困るとする発言である。批判されるのは「遠野の語り部さん」を指して他にはない。これに対して当日の同席者佐藤誠輔氏はこう述べている。

まず、語り部さんへの町の人たちの対応ですが、軽くみているんではないかと思われます。『お前たち、ホラ語つて錢もらつて、いいな』ていう、そういうものではないだろうと思うんです。語りを伝えるのも非常に大事なことだが、不特定多數の前で語るということは、大変な努力が必要なんですね。芸人になつてはいけないけれども、そういう所で語る勇気というもの、それは

小さいものではないということ。

はつきりいって、ここでの佐藤氏の発言内容は、きちんとした答えにはなつてない。「語り部さん」への擁護としか受け取れない。

それのみならず、この遣り取りの場で自ずから噴出してきた問題は、かなり深刻でしかも厄介な状況を映していると、私は読み取つた。

たとえば、仮にそこで言葉を開始するのは「ホラ語つて錢もらつて」に端を発し、彼女たちは「不特定多数の前」での「芸人」とい

う

った配分である。思うだにそこに潜在して流れるのは「民話」の「商品化」「流通」「消費」そして「観光」「歩く広告塔」といった意識

ではなくらうか。ちなみに、この座談会の進行、司会役は石井正己氏である。したがつて、著者は遠野では今日現在、何が問題になり、何が最も危険な状況を作り出しているのか

見えてきた」(p.263)と、著者はいう。

は、誰よりもよく承知し、かつ理解している意味からしても、本書は新しい局面へ挑戦予

告の一冊として位置づけられる筈である。それからして本書では、そうした

場面とか部位にむけての指摘がもつとあつ

(三) 弥井書店 本体 330円)

もよかつたと思われる。

それにしても、こうした状況の下にあって、一面観光事業と積極的に連動し合う遠野の問・研究の対象に据えようとするのは、いかにも難儀な作業だと思はざるをえない。しかし、大局的な立場からみると、実はそのこと

はひとり遠野の問題だけではない。ひとはしらばしば『遠野物語』があるから、遠野は特権的地位、あるいは位置にあるという。だが、

それは

むしろ

一つの

截り口

であつて、今日遠

野が抱え込んでいる話題で、「民話」を「芸能」、あるいは「民俗芸能」に置き換えたと

いき、何處でもが同じように直面している問題

であると思われる。それを踏まえてか「次の

課題が『語り部論』にあることがはつきりと

書評

吉川祐子著

『遠野昔話の民俗誌的研究』

石井正己